

出題のねらい

㊦は、内田樹『疲れすぎて眠れぬ夜のために』から「マッピング」に関する出題です。今の自分がどこにいるのか、空間的な位置（地図上の位置）を知ることが比較的簡単ですが、時間的な位置（歴史上の位置）を知ることが容易ではありません。我々が陥りがちな陥穽と、それをどのようにしたら知ることができるのかを述べた文章です。筆者の意見を論理的に、かつ正確に読み取ることが重要です。

㊧は、歌物語『大和物語』第七十二段と、その注釈である北村季吟著『大和物語抄』からの出題です。石山詣に出かける宇多法皇と、その饗応に当たる近江守が登場し、接待役を任された大伴黒主が和歌で宇多法皇の心を慰めた話です。敬語や文脈から話の内容を酌み取る読解力が求められます。Bの注釈も、Aの本文理解の助けにしたいものです。

㊦

【解答】(50点)

問一	a 比較	b 基本	c 綱目	
	d 宴会	e 徹底		(2点×5 = 10点)
問二	A ウ	B イ	C エ	
				(3点×3 = 9点)
問三	ウ			(3点)
問四	a 空間的	b 時間の流れ		
	c 機能	d 形成		(3点×4 = 12点)
問五	エ			(3点)
問六	見ていなかったよ。(9字)			(2点)
問七	ア			(3点)
問八	ア			(3点)
問九	世代が共有する共同的記憶を振り払い、 誰からも愛されず、認められなくとも、 自立する覚悟をもつこと。(48字)			(5点)

【解説】

問一 漢字の問題。a・b・cはよく出来ていたが、d・eは正答率六割程度でした。多かった誤答はcの「綱」を「綱」「編」としたもの、dの「宴」を「演」、eの「徹」を「撤」としたものでした。

問二 接続詞を問う空欄補充問題。文脈を読み取れば、比較的簡単に入れることができます。㊦は、その前の文章で「時間の流れの中で自分を位置づけること、それが「歴史的なものの見方」というのです」と述べていて、後には「明治以降の文化や日本の近代以降の中で自分はどのようなポジション

にいるのか、そういうことを考えるのが、歴史的発想法です」と述べて、前の文章を具体的に述べていますから、例示を表す「ウ たとえば」が入ります。

㊦は、前の文章で「彼らはリアルタイムではビートルズなんか聴いていなかったし、学園紛争にも背を向けていた」とあって、後には「その事実は忘れられ、より快適な「共同的記憶」が彼らの自分史には採用されている」として逆の内容を述べているので、逆接の「イ しかし」が入ります。㊦は、前の文章で个性的であることがとても辛いことで、そんなことができる人間は少数だと述べ、後には本当に個性的な人間というのは、個性的だと思込んでいる人間の千分の一もいないと述べていますから、順接の「エ ですから」が入ります。正答率は約八割で、比較的良くできていました。

問三 「時間の流れの中のどこに自分がいるのかは勉強しないと分かりません。」と述べる根拠を問う問題。地図上の自分の位置は、周りを見れば比較的簡単に分かって、時間の流れの中の自分の位置を知ることが難しいのは、これまでの時間の流れ（歴史の流れ）を勉強しないことには自分を位置づけれないからです。なので、正解は「ウ 歴史の流れの中で自分を相対化するの難しいから」です。正答率は約半分でした。

問四 マッピングに関する説明文の空欄補充問題。マッピングとはどういうことか、本文中の言葉を使って説明します。マッピングには空間的な位置を計る場合と時間的な位置を計る場合があります。㊦は「位置を地図上に特定する」とあるので、「空間的」（三文字）が入ります。㊦は時間的な位置のことで、五文字で答えるとすれば「時間の流れ」が入ります。㊦と㊦は、時間の流れの中での自分の位置や自分の考えがどのように出来てきたかを問うているので、㊦は「機能」（二文字）、㊦は「形成」（二文字）が入ります。全体的に良く出来ていました。正答率約八割です。多かった誤答は、㊦が歴史的、想像的。㊦が多くの情報、大きな風景。㊦が出現、構成などです。

問五 言葉の意味を全体の趣旨から考える問題。「今の自分のものの見方や考え方を絶対視する人」とはどういう人かという問いです。選択肢だけを見るとどれも正解のように見えます。しかし、ここは「全体の趣旨からすると」と聞いているので、筆者の述べる範囲で考えなければなりません。筆者は、同時代や同地域の影響を受けずに自分の意見が出来上がることはないと言っているため、正解はエ

です。正解率は五割弱でした。

**問六** 文法問題。「ぜんぜん」は呼応の副詞で、必ず否定で受けなければなりません。ここは流行した音楽やTVの人気番組やマンガや映画の記憶ですから「見る」で受けるとすれば、「見ていなかったよ」が正解となります。よく出来ていました。

**問七** 文脈上の言葉の意味を問う問題。「住民登録できる」とは、通常「その地域に住むことが認められる」ことを言います。しかし、ここは「オレたちという記憶の共同体に住民登録できる」と言っているのであり、かつその記憶は「偽造」された「模造記憶」だと述べているのですから、共同体そのものが「幻想」のもので、そこに入って住むことができる(=安住することができる)ことを言います。よって正解はアです。

**問八** 空欄補充問題。「個性的である」ということが「徹底的に知的な」何かを聞く問題で、個性的であることは他とは違う自分を徹底的に追い込んでいくことですから、それは知的な「営み」です。「企て」は「もくろみ、計画」の意。「嗜み」は「趣味、こころがけ、こころえ」の意味で、「運動」も含め、文脈と合いません。

**問九** 記述問題。「個性的である」ことがどういうことを言うのかを「共同的記憶」と「覚悟」を使って説明します。筆者は、偽造された「共同的記憶」の中には個性はないと述べています。すなわち、「共同的記憶」を取り払わないと自分という存在は現れません。さらに、「覚悟」とは、誰からも承認されないし、尊敬されないし、愛されない「覚悟」のことです。よって、「共同的記憶」を振り払い、誰からも愛されず、認められなくとも、自立する「覚悟」をもつことが「個性」なのです。正答率は約七割程度です。概して良く出来ていました。



【現代語訳】

A

宇多法皇は、石山寺に常にご参詣なされた。近江国の国司が「(こう度重なると)民も疲れ、国も滅びてしまう」と迷惑がっていると、(法皇は)お聞きになって、他の国々の荘園領主などにお命じになったので、(命じられた者たちは)物を運んで、御幸の準備を整え申し上げ、そして、(法皇は石山寺に)ご参詣なされたのであった。

近江守は、「どうして(法皇は)お聞きになったのであろうか」と、嘆き恐れて、また、「まったく何も接待せ

ず、そのまま宇多法皇をお通し申し上げてよいだろうか。いや、それはよくない」と思って、(石山寺から)お帰りになる道中の打出浜に、世にもめずらしい立派な行在所を造って、見事な菊の花を植えて、お接待の準備をしてさしあげていた。近江守は、恐縮して、他の場所にじっと隠れて、ただ黒主だけを据え置いたのだった。

(法皇が)通り過ぎあそばす時に、殿上人が「黒主はどうしてそんなところに控えているのか」と尋ねた。法皇も、御車をお止になって、「どうしてここにいるのか」とお問いになったので、人々が尋ねたところ、黒主は、次のように申し上げた。

さざ波が絶え間なく岸を洗っているようです。渚がきれいであつたら、法皇様にお留まりになってくださるようにと思つてのことでしょう。

と詠んで和歌を書いて献上したので、この歌に(法皇は)感心なされて(その行在所に)留まって、人々に禄を賜つて京にお帰りになったのであった。

B

○人々とひけるに 宇多法皇が、近臣などに、黒主の事をお問いになるので、近臣たちが、また、黒主に問うのである。直接、宇多法皇が黒主にお問いになるのではない。また、黒主も、はじめ、殿上人などが問うた時は何とも言わないで、今、宇多法皇のお尋ねに答えて、近江守の接待の旨を申し上げられるのである。

○ささらなみ さざなみと同じ。近江の事をいうときに、よく用いられる言葉であるように、奥義抄に書かれています。歌の心は、湖水の波が、繰り返し、岸を洗う事を、法皇様も、清らかさに御心をお止めになるだろうかと思つてそうするのだろうか、波のことを言つて、近江守の忠節を表現していらつしやる。( )という句に、至極、奔走の心がこもっているのではないのでしょうか。人間関係をよくする事、和歌よりふさわしいものはないとか、古今和歌集の序に書かれています。真実なるかな。

【解答】(50点)

問一	まうで	(4点)
問二	ウ	(4点)
問三	イ	(4点)
問四	④異 ⑪直	(3点×2=6点)
問五	⑤オ ⑧イ ⑩ウ	(4点×3=12点)
問六	イ	(4点)
問七	植う	(4点)
問八	エ	(4点)
問九	I まもなくしを	(4点)
	II 「めり」の場合は湖岸に絶え間なく打ち寄せる波の姿を視覚的に捉えるのに対して、「なり」の場合は波の音を聴覚的に捉えている。(60字)	(4点)

## 一般入試／国語(前期)

### 【解説】

問一 「石山」は地名でもあります。ここでは「まうで」とあるので、石山寺ということになります。「参る」「詣づ」は貴い場所に行くこと。「お寺参り」「初詣」という言葉は現在も使われます。設問に「単語」とあるので「まうで」が正解です。設問の意図が理解できず、「打出浜」という誤答が目立ちました。正解率二割程度。

問二 「民疲れ、国滅びぬべし」と国司が心配した理由を問うています。選択肢から正解を選ぶ問いでは、不適切な点があるかどうか吟味しましょう。アは、「御幸に随行する者たち」は法皇の近臣たちで、近江国の役人たちではありません。また、御幸のたびに「荘園領主たちに準備命令を下」したり、「贅沢な行宮を造」ったりするわけではありません。よって、正解としてウが残ります。これも正解率三割程度。

問三 「わぶ」は、「わびる」という一段活用動詞として現在ではエの意味で使用されています。古文では、アあるいはイの意味で用いられることが多く、ここは文脈からイが正解です。正解率二割程度。

問四 ④ 宇多法皇は、近江国の国司が「こんなに何度も石山詣をされては、その饗応費を賄うために、民が疲れ、国が滅んでしまう」と迷惑がっていると聞きになったので、近江国以外の他の国の荘園領主に饗応の負担をさせたのです。「異なる国々」の意味です。意味を考えず「事」と漢字を当てた人も多くいました。正解率三割程度。

① 宇多法皇が「何のために、ここにいるのか」と問い、これを受けて、人々が黒主に問うています。法皇が直接、黒主に問うたわけではありません。現在でも、直接の意で「直(ちよく)に」ということがあります。それが古語では「ぢきに」となります。平安時代は貴族社会ですから、身分や階級が異なると、通常、直接会話することはありません。

問五 古文を読解するためには、敬語の知識が必須のものになります。⑤の「聞こしめす」は「聞く」の尊敬語で、動作主体は法皇になります。⑧の「つかうまつる」は「す」の謙譲語で、法皇のために行った近江守の動作と判断できます。⑩の「申す」は「言ふ」の謙譲語で、法皇あるいは殿上人に向かって申し上げた黒主の詠歌ということが知られます。⑤⑧の正解率二～三割程度。⑩の正解率が三～四割程度でした。

問六 「さて」は、「そうした状態のまま」が直訳で、文脈を重ねてみると、「何も接待せず、そのまま」ということになります。「過ぐしたてまつる」は、「石山詣される宇多法皇をやり過ごす、お通し申し上げる」ということです。「てむや」は、少し難解ですが、強意(完了)の助動詞「つ」の未然形+適当の助動詞「む」の終止形+反語の助詞「や」で、～するのが適当だろうか、いや適当ではない、の意味です。アは「過剰な接待」、ウは「荘園領主たちを通過させ」、エは「要請もないのに」が不可。正解率三割程度。

問七 ワ行は「わ・ゐ・う・ゑ・を」です。「植ゑず」と下二段活用なので、「植う」が終止形。ワ行下二段活用動詞は「植う」「飢う」「据う」三語なので憶えておきたい。

問八 文学史問題。『古今和歌集』仮名序に見える「六歌仙」は、僧正遍昭・在原業平・文室康秀・喜撰法師・小野小町・大伴黒主。紀貫之は、『古今和歌集』の撰者である。正解率二割程度。

問九 I 「いたりて奔走の心あるにや」に該当する句を選ぶ。「御馳走」の語源も含め、走り回って、おもてなしの準備をしたというのです。「ささらなみ」「まもなくしを」「あらふめり」「なぎさきよくは」「君とまれとか」の中で選べば、「間断なく」準備をしましたという意を含む第二句しかありません。正解率は一割程度でした。

II 古典文法の教科書などによって古文読解の学習をしてこなかった人にとっては、難解な問いだったようです。設問にヒントがあります。「めり」も「なり」も「五感による推量という共通点があるが、それぞれ違った感覚に依拠している」という箇所を見落とさないことが肝心です。「めり」は「目」に、「なり」は「音(ね)」に通じます。波の姿を視覚的に捉えるか、波の音を聴覚的に捉えるかという相違です。